もくじ
文化遺産を伝える史跡④日比谷家屋敷の遺構 … P1　大久保家資料の紹介⑦
大正・千住の名士たち … P3　お化け煙突60年　発電のしくみと装置② … P4

足立史談
第667号
2023年9月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

文化遺産を伝える史跡④

幕末明治・日比谷家屋敷の遺構

多田文夫

図1　日比谷家屋敷の神社の祠と手水鉢　中央本町五丁目にある大型商業施設の南側にある。三峯神社で、かつての屋敷の北西角の築山にあった。建物は後に改築して現在地に移されている。

日光街道（国道四号線）と環七通りが交差する梅島陸橋の南東に大型の商業施設があります（足立区中央本町五-五-十四）。ここから南のバス通りにかけてのエリアが、幕末明治の郷土、日比谷健次郎の屋敷があったところです。北辰一刀流の道場主であり、小右衛門新田を中心とした大土地経営者で、館のような大きな屋敷がありました。今回はこの日比谷家の屋敷をご紹介します。

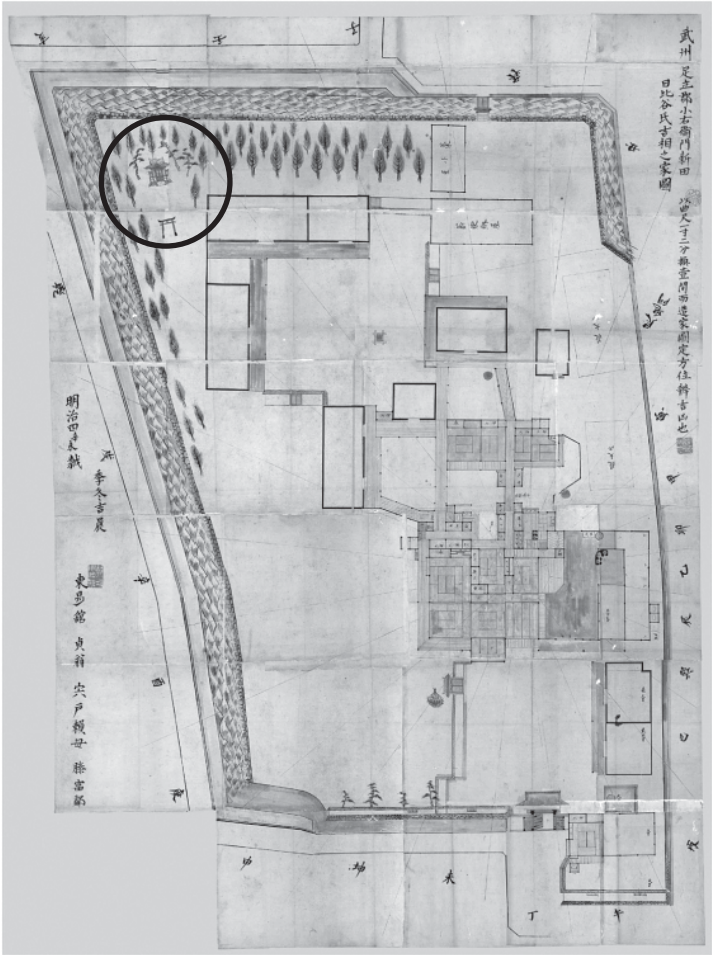


図2　明治四年（一八七一）の日比谷健次郎の屋敷図（宍戸頼母作）　堀がめぐっている。上（北）の堀が現在の環七通り付近、下（南）の門のあるあたりが栗島住区センターバス停（綾瀬駅方面）付近。南北約一〇〇m、東西は北辰で約八八m、南辺で約七〇mの規模である。

■屋敷を物語る遺構

現在、この地は商業施設、住宅、倉庫等の市街地になっていますが当時の屋敷遺構がいくつか残されています。

一つめが**図1**の屋敷の神社、三峯神社です。商業施設の南東に移設され、いまも日比谷健次郎家のご子孫（後述）が守っています。もとの位置は**図2**が参考になります。明治時代の屋敷図で、社殿は北西角に描かれています。その後、建物は昭和に改

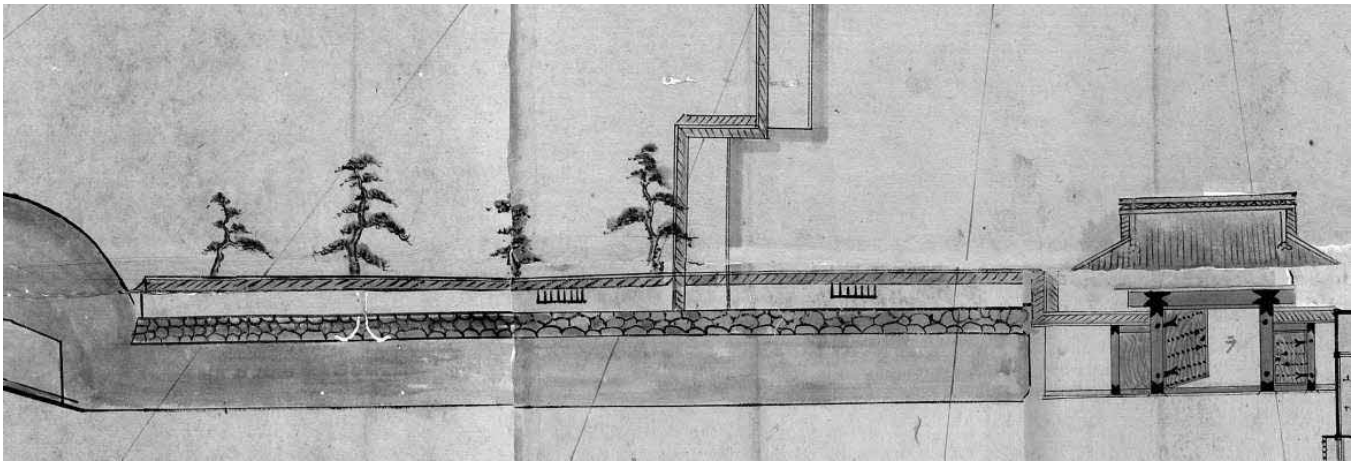


図３（上）屋敷図の正門と堀、石垣がある南側部分の拡大。
図４（左）移築保存されている石垣。

築されたそうです

■正門と石垣　前掲の屋敷図に描かれた南側の門と堀の部分を拡大したのが**図3**です。図の右側には薬医門とおぼしい正門があり、左右に塀があり、そのまま堀の石垣の上に繋がっています。屋敷図全体**図2**をみると、堀は南側、西側、北側の三方に回り、東側の北部にも一部入っています。石垣も堀に沿って確認できます。

この象徴ともいえる正門と塀は失われていましたが、石垣は幸い近年まで残されており、先述の商業施設建設工事の折に確認調査が行われました。

発掘調査で地下数mの深さまで石垣が続いており、さらに最下部にケヤキ材を置いて石垣を支える構造であることがわかりました。最下部から見つかった木材について、調査研究を進めるワークショップ（後述）において、この木材の年代を酸素同位体比法で調査した結果、文久二年（一八六二）と判明し、発見された石垣が幕末期に築造されたことが判明しました。明治初年の絵図に描かれた日比谷家の屋敷は、館のような構造を持っており、これは幕末期に整備されたことが地中の資料から明らかになっています。

こうした幕末維新期の歴史を伝えるため、日比谷家では石垣の一部を保存、商業施設の南西側に移築保存されています**図4**。

■日比谷健次郎とご子孫　日比谷健次郎の家は、家号を「山大」、通称を「新右衛門」といいました。江戸時代初めの小右衛門新田の開発人の一人、日比谷小左衛門を祖とする一族です。

日比谷健次郎は、北辰一刀流の道場主であり、幕末の動乱期には幕府旗本家族の受け入れや、御用金の運用なども行った郷士として活躍しました。さらに明治一〇年（一八七七）には日本初の本格的和独辞書『和獨對訳字林』を義父の加藤翠渓（三郷市戸ヶ崎）と刊行し、その名を残しています。

平成二六年（二〇一四）、日比谷新右衛門家（健次郎の家）の遺産を受け継いだ日比谷二朗氏（歯科医。日比谷歯科ほか運営）は、前掲の三峯神社の移設や石垣の保存を行い、さまざまな歴史・美術・生活文化資料の整理と調査研究を続けています。

■ワークショップ　翌二七年はじめには同族の日比谷平左衛門家のご子孫、日比谷孟俊（たけとし）氏（元慶應義塾大学教授、現、実践女子大学研究員）と研究を開始します。同年、日比谷家をお訪ねする機会があり日比谷二朗、孟俊の両先生の研究活動に当館も参加しました。

さらに平成二八年には「足立における郷土の歴史と文化に関するワークショップ」に発展、先述の木材の年代特定も同会で報告されました。慶應義塾大学の井奥成彦研究室とともに郷土博物館や慶應義塾大学などを会場として、十回を超えて開催されています。博物館ではこのワークショップと協働で、コロナ禍中でしたが『名家のかがやき』展（二〇二〇年）を開催することが出来しました。

■広がる関心　こうしてワークショップや展覧会で注目された日比谷家の伝来資料は、思いがけない広がりを見せています。この中央本町の日比谷家屋敷が保存、伝来した文化遺産の一つ、『和獨對訳字林』の刊行に関する調査研究です。いまドイツやハンガリーな

ど、国外からの研究参加もはじまっています。

図5は今年七月十四日にハンガリー大使館文化部、リスト・ハンガリー文化センターの主催（会場＝港区麻布十番の同センター）で日比谷健次郎らが発行した『和獨對訳字林』の研究報告とディスカッションが行われました。

その中でハンガリーは一九世紀から二〇世紀初頭、オーストリア・ハンガリー帝国を形成し、影響があるのか、この辞書の表記方法にハンガリー独特の綴りが確認されるなど研究が進んでいます。

日比谷家は様々な足立の幕末明治の文化を伝え、その屋敷の遺構は史跡として大切に保存されています。

（学芸員・文化遺産調査担当係長）

図5　日比谷孟俊氏の講話を聴く参加者

大久保家資料の紹介⑦
大正・千住の名士たち
郷土博物館

本誌665号で紹介した大久保家の古写真について千住仲町の相川謹之助さん、長谷川浩平さんから情報が寄せられ、大正十一（一九二二）年当時の千住の名士たちの写真であることが判りましたのでご紹介します。下段に掲載した写真の右からご紹介していきます。

①金坂芳太郎　千住仲町にあった江戸時代からの老舗、「松うなぎ」の店主です。同店には水戸家の当主も立寄ったと伝えられています（『千住總覧』むさし新聞社、昭和六・一九三一年）。

②大久保伊助　本連載の資料所蔵者のご先祖、千住四丁目の地漉紙問屋・紙屋（紙問屋）のご当主です。多彩な作品や古文書を伝来した家です。

③横山佐助　同じく千住四丁目の地漉紙問屋・松屋、いまも往時の姿を伝える横山家住宅の当時のご当主です。谷文晁や狩野壽信の作品をはじめ古文書・古記録を伝来した家です。

④内田與兵衛　江戸時代の川魚仲間以来の伝統を受け継ぐ千住仲町の川魚問屋・鮒與のご当主です。酒井抱一がデザインした原羊遊斎の酒合戦大盃をはじめとする文化遺産を伝来した家です。京都大学の歴史学者、内田銀蔵もこの家の人です。

⑤若田太右衛門　千住仲町の畳屋薬のご当主です。当館で開催した展覧会でご紹介している千住の琳派絵師、村越向栄と交流し、作品をはじめ向栄との交流や薬問屋の資料を伝来しました。

⑥山崎雅吉　戦前、千住仲町にあった敷物（当時）の山崎商店のご店主です。

戦後、商店は千住二丁目に移ります。先代の山崎健さんは、郷土としての千住町について造詣が深く、博物館も多くのご教示を賜りました。

⑦河合欣三郎　千住の名酒として知られた河合の白酒の「酒醸造」と「卸」の商店の御主人です。欣三郎氏はその白酒を発展させた人物で（『足立史談会だより』四〇三号、足立史談会）、東京大学の経済学者河合栄治郎の実家です。

⑧加藤幸三郎　千住仲町にあった米穀問屋、鈴幸商店の店主です。現在の足立区役所千住庁舎（千住仲町）の地にあった大店です。幸三郎氏は写真撮影の翌年に発生した関東大震災の時、南足立郡千住町長で震災の復興に尽くしました（『大震災千住町写真帖』、千住町庶務課、大正十三・一九二四年）。

大正の千住の名士たちが箱根に旅行したときの一枚の写真は、当時の町の人々の結束力を物語っています。

お化け煙突60年

発電のしくみと装置②

千住火力発電所の元職員、格和宏典さんに文章をお寄せいただいています。

■燃焼と蒸気発生の仕組み　貯炭場から屋上階に上げられた石炭は、自重によってストーカー上に落ちてきて燃焼します。燃焼した石炭は地下の水槽に落ち消火され灰になり、ベルトコンベアーで地上に送られ灰処理場に運ばれます。

燃焼している石炭は、加熱水管内の水を熱して蒸気を作りドラムに入ります。ドラムの蒸気は水分を多く含んでいますからスーパーヒーター（加熱器）で加熱し、乾燥した蒸気にしてスチームレシーバー（蒸気溜）に送られ、他のボイラーで作られた蒸気とともにタービンに送られます。

ボイラー内への通風は、地下室にある押込送風機で煙突の吸引風圧との相乗効果で、燃焼に必要な空気を送り込んでいました。

ボイラーには水が必要ですが、給水ポンプからエコノマイザー（節炭器）で冷たい水を温め、ボイラーに給水していました。

■汽缶室　写真は、汽缶A室で、左手前から1～3号、右が4～6号です。中央に運転を指示する電光掲示板、正面奥に当直主任ほかが詰める「箱番（はこばん）」と呼ぶ部屋がありました。

■箱番　語源は不明です。1・8メートル×4・5メートル程度の汽缶室唯一の部屋で、3交代勤務者最高位の当直主任、ボーシンと呼ばれる主任補佐の総括者、計器盤の記録担当者、重油助燃装置の操作者が詰めていました。この当直主任が箱のような狭い部屋で番人のように我々を監視し、にらみをきかせていたからなのかなぁと推測していました。

■ボーシン　千住火力在籍時、定年間近の先輩に聞いたところ、「昭和10年頃は、所長を主任と呼んでおり、その下には職制がなく、社員で一番給料の高い者が係長級の仕事をし、その下の一般職のうち職場や作業の実権を握っている者をボーシンと呼んでいた。その呼び名の起源は分からない。」とのことでした。

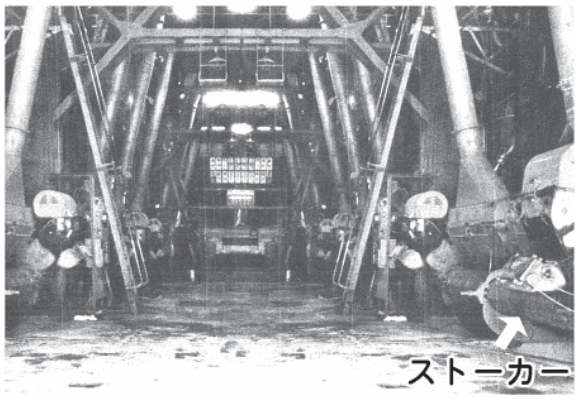
建設当初は、船舶用ボイラーの技術を流用していたようで、アメリカ人技術者にもその類の人がいたかもしれず、水夫の親方をボースン（boatswain）と呼んでいたのが、日本人の耳にボーシンと聞こえ、現場をまとめる総括者クラスに使用したのかも知れません。

■缶前（かままえ）　職場は班体制で数種の職務がありましたが、最も多かったのが、一人1缶担当のボイラーマンで10人でした。その人たちは缶の面倒をみるため忙しく働いていましたが、缶が落ち着いて監視業務に入るとストーカーの前に陣取りました。このため、この作業員を「缶前」と呼んでいました。

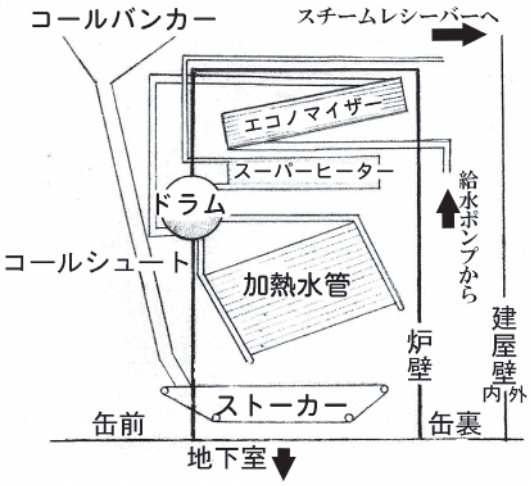
缶前にとって缶が順調に動いているときが至福のひとときですが、タービン・発電機の異状発生で緊急停止があるとボイラーの停止が間に合わず蒸気圧力が上昇し安全弁が作動することがあります。当直主任が箱番から飛び出してきて。「3・4・6！まいかぁー（埋火）！」と叫ぶ。当該缶前は火消し（埋火）に突入、他の缶前は自分の缶を横目で見ながら埋火の応援で駆けずり回る。いっときの戦場。ようやく安全弁からのすさまじい音も止み、ボイラー建屋はいつもの機械音に包まれる。「うーうんめぇー」。デッカイ薬缶の水を一気に飲み干す。「ふぅ～」。安堵の表情。これもいっときの至福の時間でした。

このほかにボイラーに水を送る給水担当、ボイラー水を汲み上げる水処理担当、地下室の灰処理担当、記録担当、重油助燃装置の担当者など、主任以下20名程度の陣容でした。

つづく



［写真］（汽缶）ボイラー



［図］ボイラー概略図